

留学の夢をあきらめず、 社会人になってから実現。

1905年に愛知淑徳女学校が誕生してから70年目の1975(昭和50)年、学園は愛知淑徳大学を開学。国文学科と英文学科から成る文学部のみの女子大でしたが、1995(平成7)年に男女共学体制となり、学部数も増加して、今年4月から8学部体制になります。卒業生に学園の思い出を語っていただくシリーズの第19回は、文学部英文学科卒業生で現在、本学の非常勤講師も勤める野口朋香さんに登場していただきました。



愛知淑徳大学文学部英文学科第18回卒業生
(平成7年度卒業)
野口朋香さん

卒業後、商社に入社。営業アシスタントとして2年半勤務した後、1998年にウエストバージニア大学大学院コミュニケーション研究科修士課程入学、修士号を取得。大学附属の語学センターで1年間、日本などから語学研修に訪れる留学生のアドバイザーとして勤務。帰国後は愛知淑徳大学、南山大学等で非常勤講師として英語とコミュニケーション学を教える。2005年、名古屋大学国際開発研究科国際コミュニケーション専攻博士後期課程入学。2009年3月、満期退学。10月より岐阜医療科学大学の専任講師に。同月、松本先生他と共に著書で「ネットで楽しく英語コミュニケーション」を出版(P7参照)。



3年生の時、学園祭に来てくれた友人と展示室を回る

卒業式の日、サロン・シーボンを背景に



ゼミの松本先生と友人。研究室の引っ越しを手伝う

いろいろな施設を訪ねたりイベントに参加したり。ボランティアというところから活動と思われがちですが、さまざまな出会いから学ぶことの方が多かったですね。

平成7年に阪神大震災が起きた時は、直後から大学内で義援金を募りました。学内に設置した募金箱を夜に回収するのですが、昼間は置きっぱなし。それでも2か月くらいで20万円ほどが集まり、淑徳の学生は温かいなと思いましたね。義援金は中日新聞へ愛知淑徳大学有志として寄附をしました。

英語の集中講座などには積極的に参加するようにして、日常会話には困らないくらいの英語力は身に付いたと思います。

卒業する頃は超氷河期でしたが、運よく商社に入ることができました。いつかは仕事で英語を使えるかなど期待しましたが、古い体質の会社で女性は20代後半になると居づらくなる雰囲気です。このままいいのかと疑問に思った時、留学という夢

を思い出し、必死に勉強してアメリカのウエストバージニア大学へ留学しました。大学から奨学金をいただいたのですが、その条件が1年で修了すること。大学からアパートに戻って8時間は勉強する毎日で、体重が7キロも落ちました。一生のうちで一番勉強した時期だと思います。

帰国してから愛知淑徳大学と南山大学などで英語とコミュニケーション学を非常勤で教え始めました。母校の教壇に立つなんて思ってもいませんでしたが、若い人はこれから無限の可能性を持っています。私が話したことが少しでも彼らの役に立てば嬉しいですね。

教える傍ら、名大の大学院博士後期課程で研究を続け、昨年10月からは岐阜大学の専任講師をしています。現在はインターネットを使った英語教育に関心があります。ボイスチャットなどを利用した新しい学習方法が次々と出てきているので、最近の学生は恵まれていると思います。

淑徳は中高大と10年間お世話になりましたが、いい友だち、いい先生に恵まれました。ずっと女子校で、誰かに頼るのではなく、何でも自分で切り開いていくという自立心が養われましたが、柔軟性を持って時代をこなやかに生きる、女性としての生き方の根底を築いてくれた10年間だったと思います。(談)

愛知淑徳へは自分で希望して中学から入りました。両親が映画好きで、子どもの頃に「スター・ウォーズ」や「インディジョーンズ」に連れて行ってもらったのですが、いつか俳優の話す言葉をそのまま理解したいと思い、英語を勉強するようになりまし。中学では楽しみながら英語を学び、高校では国際英語のクラスに入りました。当時、愛知淑徳高校には語学センターがあって、ネイティブの先生や、大学の石橋千鶴子先生から時事英語を教えてもらったりしていましたね。

3年生の夏休みには1か月、アメリカへ語学留学へ行きました。いろいろな生徒と友だちになれて楽しかったのですが、いつかは本格的な留学がしたいと思っていました。

愛知淑徳高校からは当時、愛知淑徳大学へ進学する生徒が多く、私も内部推薦で文学部英文学科へ進みました。文化に興味があったので言語文化コース(現在のコミュニケーション学部言語コミュニケーション学科の前身)を選びました。3年から松本青也先生のゼミに入りましたが、アメリカ人の価値観や哲学についての文献を英語で読み、とても勉強になりました。ゼミの友人たちも好奇心旺盛で真面目で、刺激になりましたね。

卒論は「日米のユーモア比較」がテーマで、日本語と英語でアンケートを作り、英語の方は知り合いのアメリカ人に頼んでアンケートを回収してもらい、統計を出したりしました。部活はボランティアサークルDo!で副部長を任されていました。いろ